

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520617

研究課題名(和文) 留学経験から発想する日本語授業の新たな意義－PAC分析を活用した縦断的研究－

研究課題名(英文) New Significance of Japanese Language Classes Considering Oversea Education Experience: Chronological Study Using PAC Analysis

研究代表者

丸山 千歌 (MARUYAMA, Chika)

立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授

研究者番号：30323942

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：研究計画に沿って、英国の現地教員の協力を得て、留学前、中、後の調査と現地教員への対面調査を実施できた。研究開始初年度に、一定期間空けて3回の調査を実施するよう調査実施時期の調整を行ったが、この調整は適切だったと判断している。

現段階で同じ環境の日本語学習者でも留学が初めてかどうかという違いで留学中に体験の違いが出ること、送り出し機関での学習や日本語教育の位置づけの違いなどが学習者の留学体験、そこから得るものに影響を与えている可能性があることがわかってきており、成果の一部は中間報告として発表した。今後さらなる分析を進めるとともに、現地教員と本データに基づく共同研究に発展させる。

研究成果の概要(英文)：Planned interviews to students from UK and teachers in UK were successfully conducted. The students were interviewed at three different periods of times; before study abroad, during the study abroad and after returning to UK. During the first year of the study, the researchers decided to increase the length of the intervals between the three periods so that they can observe influences of the study abroad better.

Due to the change in the schedule, the analysis in depth is still continuing but the findings at this stage are two. (1) Study abroad experience may differ according to whether the student comes abroad for the first time. (2) What students experience during their study abroad and what they learn from that may receive influences by the two factors; how they learn Japanese in sending institutions and how those institutions characterize Japanese language education. Besides the ongoing analysis, the researchers plan to develop a collaborative new research using this data.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、日本語教育

キーワード：国際情報交換 日本語教育 学習者 読解教材 英国

1. 研究開始当初の背景

日本語教科書のトピックは、日本語学習者の関心や、「読み」の学習目標の大切な一つに学習者が日本の習慣や文化について知識を得ることにあることを背景に、書き下ろし教材でも生教材でも日本社会や文化関係のものが多い。しかし、他分野から、例えば社会学の研究者からは、外国語教師である日本語教師が日本人論の伝播の過程において、文化的差異をめぐるステレオタイプの言説の再生産や伝播の一翼を担っているという批判や(吉野、1997)、1990年代後半であっても1970年代に流行した日本人論の代表作が語学の教材として積極的に消費されつづけているという指摘(吉野、1997)、そして異文化間教育の研究者からは日本語教育にステレオタイプを温存する教師文化が存在するという指摘(倉地、2006)を受けている。

野呂(2001)や佐藤他(2008)など、日本語教育の中でも、上述の問題に対する取り組みが始まっているが、これらは教材分析と授業観察、それに基づいた授業改善に重点をおいているように見える。それに対して、本研究は、学習者の視点、すなわち日本語学習者が日本語教科書とどのように向き合っているかという学習者個人と教材とのインタラクションの観点から、教材作成や教材選定、授業運営への提言につなげようとする点に特徴がある。

本研究は『PAC分析法を活用した学習者が日本語教材から受ける影響と学習者要因の解明』(平成19年度-21年度基盤(C)課題番号19520449)(育休による中断を含むので実際には平成22年度まで)の発展的研究であるが、上述の先行研究で、研究代表者らは、量的調査の性質も備えた、信頼性の高い質的調査の手法である、内藤(2002)のPAC分析法を研究手法として、オセアニアの日本語学習者を対象とした縦断的研究を行い、(1)

ステレオタイプの読解教材の記述が調査協力者の日本・日本社会のステレオタイプを強化していることを示し、予想以上にステレオタイプの教材の与える影響は大きく(丸山、2007)、(2)ステレオタイプの教材の読み取りは留学をすることだけでは変わらず、むしろ留学中の接触体験の深さと新味が、日本語学習者の批判的な視点を持った、主体的な読みを促す鍵になるという示唆を得た(丸山・小澤 2010)。また、(3)この研究課題は、日本語教師や学生の側が異文化やステレオタイプをどう受け止め捉える素地があるかということや、授業設計の中で教材の扱いをどれだけ自由にできるかという運営上の問題などにも関連する、当初研究代表者らが想定していたより広い研究分野に関わる課題であることがわかったのだが、これらに応える授業運営の提案が、日本語授業の新たな意義づけにつなげられるという感触を得た。本研究から得られる知見-滞日期间における日本語授業の新たな機能-が、教材論や授業論を成熟させるとともに、日本語教育以外の分野のさらなる支持と連携を得られることを期待する。

2. 研究の目的

以上の学術的背景を踏まえ、本研究では、平成22年度までの科研プロジェクトの発展的研究として、研究代表者の所属機関の協定校との連携により、学習者条件を一定に保った形で、短期交換留学プログラム生の留学前、留学中、留学後の縦断的研究を行い、教材作成・教材選択・授業運営への提言を行うとともに、留学生30万人計画を遂行する時代を迎える中で留学という観点から、日本語教育、特に日本語授業に新たな価値付けをし、発信することを目指すものである。

研究代表者らのこれまでの研究成果から、留学前の日本語学習歴や渡日歴、民族性などの要因が同じでも、ステレオタイプの教材

の読み取りは留学することだけでは変わらず、留学中の接触体験の深さと新味が、日本語学習者の批判的な視点を持った、主体的な読みを促す鍵になるという確信を得た。一方、学習者要因として、留学前までに培われたステレオタイプや、彼らが受講する日本語授業担当教員のステレオタイプなどの分析の必要性も確認された。このように研究の焦点が十分に絞られたので、留学時期を揃えた留学生を一定数確保した、詳細な分析が可能になった。そこで、本研究ではそれらを射程にいった新たな研究計画として、留学経験とステレオタイプの教材の読み取りのメカニズムを明らかにするとともに、その活用による日本語授業の新たな機能を提示する計画を立てた。具体的には、(1) 学部3年次に日本語課程の学生全員に日本留学を課す日本語課程を持つイギリスまたはオセアニア地域の協定校を調査校として、学習者条件を一定程度に確保し、異文化体験のプロセスで明らかになっている再適応の状況を踏まえつつ、留学前・中・後のPAC分析法を研究手法とした縦断的研究を行う。その際、日本語授業を学習者要因の一つとして、先方の日本語教育担当者と連携し、留学前後の情報を直接得るとともに、教員への調査も並行して実施する。(2) 異文化への対応の様子などを含めた形で学習者要因を詳細に検討し、学習者と読解教材とのインタラクションとの関連を見る。(3) (1)(2)の成果から教材論に貢献する成果を発信する。(4) (1)-(3)をもとに、異なる読みをする日本語学習者相互のインタラクションを活用した授業を実施し、授業運営に貢献する成果を発信する。

3. 研究の方法

本研究の目標は、留学前・留学中・留学後を重要な観点とした質的調査を普遍性・個別性の2方向から分析し、教材と学習者との関連に着目した理論の構築に向け、特に学習者

が教材から受ける影響と学習者要因との相関を解明することである。この目的の達成のためには、日本留学前の大学教育機関の日本語学習者と、日本留学中の大学教育日本語学習者、日本留学後の大学で教育を受けている日本語学習者を対象とする調査の実施が不可欠である。そこで、本研究は、第1段階(平成23年度)、第2段階(平成23・24・25年度)と第3段階(平成25年度)の3段階を設定した。

< 本研究の3段階 >

第1段階：PAC分析の実施に向けた調査計画とフェイスシートの検討を行う。

第2段階：留学前-留学中-留学後を重要な観点としてPAC分析を実施、結果の考察を行う。

第3段階：第2段階での研究成果を踏まえ、異なる読みをする日本語学習者相互のインタラクションを活用した授業を実施し、これについてのPAC分析を実施、結果の考察を行う。

4. 研究成果

平成23年度は本研究の第1段階として、PAC分析の実施に向けた調査研究とフェイスシートの再検討を行い、調査先を研究代表者の前所属機関(横浜国立大学)および研究分担者の所属機関(国際基督教大学)と学生交流協定のある大学教育機関の中からPAC分析で扱う読解教材の特徴に合った調査地域を選定・調整を行い、イギリスのカーディフ大学とロンドン大学SOASに決定した。その後、本研究の第2段階として、3月に研究代表者と研究分担者が調査地域に渡り、留学前の日本語学習者を対象としたPAC分析を行うとともに日本語担当教員への対面調査を実施した。

平成24年度は、前年に実施した留学前の日本語学習者を対象としたPAC分析インタビューの文字起こし作業を行い、データ化を進めるとともに、結果の分析に着手した。

次に、留学中の日本語学習者を対象としたPAC分析を、時期を年度末にずらした上で実施した。この留学中の調査は、計画当初は年度半ばに実施する計画であったが、『PAC分析法を活用した学習者が日本語教材から受ける影響と学習者要因の解明』（平成19年度-21年度基盤（C）課題番号19520449）での留学中・留学後の日本語学習者へのPAC分析データを分析する中で、留学中のPAC分析インタビューは、留学期間の半ばに、留学後のPAC分析インタビューは帰国後少し時間が経過したころに実施するのが適当だという判断に至り、調整し直した。

平成25年度は、ひきつづき留学前のデータを分析するとともに、留学中の日本語学習者を対象としたPAC分析インタビューの文字起こし作業を行い、データ化して分析を進めた。また、前年度に調整を行った研究計画に従って、3月に研究代表者と研究分担者が調査地域に渡り、留学後の日本語学習者を対象としたPAC分析インタビューは年度末の3月に実施するとともに、日本語担当教員への対面調査を実施した。

本研究の第3段階の一つであるデータ分析は、現在も継続中であるが、現段階で同じ環境の日本語学習者でも留学が初めてかどうかという違いで留学中に体験の違いが出ること、送り出し機関での学習や日本語教育の位置づけの違いなどが学習者の留学体験、そこから得るものに影響を与えている可能性が見えてきており、成果の一部をトロント（カナダ）の学会でも中間報告として発表した。現在は留学後の調査を踏まえた分析を行うとともに、それを踏まえた授業のありようを考察している段階である。また、現地の教員と今後、今回採取したデータに基づいた共同研究を行うこととし、海外の研究者との連携を深める予定である。

引用文献：

倉地暁美（2006）「カルチャー・ステレオタイプ」縫部義憲監修・倉地暁美編集『講座 日本語教育学 第5巻 多文化間の教育と近接領域』スリーエーネットワーク、66-81.

佐藤慎司（2007）「日本人のコミュニケーションスタイル」観とその教育の再考 - アメリカの日本語教科書を例として『WEB版リテラシー』4(1), 1-9, 2009年12月11日

<http://literacies.9640.jp/21web/web01.html>より取得.

佐藤慎司・ドーア根理子編著（2008）『文化、ことば、教育-日本語/日本の教育の「標準化」を越えて』明石書店.

内藤哲雄（2002）『PAC分析実施法入門[改訂版]』ナカニシヤ出版.

野呂加代子・山下仁（2001）『「正しさ」への問い』三元社.

丸山千歌（2007）「日本語教材の文化トピックからの学習者の発想-学習者とのインタラクションの解明に向けたPAC分析の可能性-」『日本語教育のフロンティア』くろしお出版、161-184.

丸山千歌・小澤伊久美（2010）「日本語学習者の経験は日本語読解教材に対する反応にいかん表れるか- PAC分析法を用いた縦断的研究から-」『2010年世界日本語教育大会』台湾国立政治大学.

吉野耕作（1997）『文化ナショナリズムの社会学』名古屋大学出版会.

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 10件)

丸山千歌・小澤伊久美（2012）「日本語教育研究におけるPAC分析を活用した研究の展開」『新時代的世界日語教育研究』、146-152頁（査読有）

〔学会発表〕(計 20件)

丸山千歌・小澤伊久美「読解教材を刺激とした留学生の発想 日本人との接触や日本体験はどのような影響を与えているか

」(ポスター発表) (小澤伊久美との共同ポスター発表) 『CAJLE Annual Conference 2013』、於トロント大学、2013年8月24日、49頁

丸山千歌・小澤伊久美「留学プログラムの設計の違いが日本語学習者の読解教材への反応にいかん表れるか」 『PAC分析学会第6回大会』2012年12月08日～2012年12月08日、金沢工業大学

小澤伊久美・丸山千歌「日本語学習者のアイデンティティは読解教材から連想するイメージにいかん現れたか - PAC分析法を活用した留学前・中・後の縦断研究から -

」 『日本語教育国際研究大会』2012年08月18日～2012年08月18日、名古屋大学

小澤伊久美・丸山千歌「同じ読解教材を刺激としたことがいかに連想に現れたか - 留学生Fに対する縦断的PAC分析調査から」 『PAC分析学会第5回大会』2011年12月7日、国際基督教大学

小澤伊久美・丸山千歌「日本人の親を持つ日本語学習者Xにみられる日本留学経験と読解教材との相互作用」 『日本質的心理学会 第8回大会』2011年11月26日、安田女子大学

丸山千歌・小澤伊久美「留学経験から考える日本語教育の可能性 PAC分析を活用した縦断的研究から」 『2011世界日本語教育研究大会』、2011年8月21日、天津外国語大学(中国)

〔図書〕(計 2件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://publicize.exblog.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

丸山千歌 (MARUYAMA, Chika)

立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授

研究者番号: 30323942

(2) 研究分担者

小澤伊久美 (OZAWA, Ikumi)

国際基督教大学・日本語教育課程・講師

研究者番号: 60296796

(3) 連携研究者

田中和美 (TANAKA, Kazumi)

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号: 10595911